

モデル事業名	高齢化もなんのその！地域の“絆”再生事業
活動団体名	(社) 高山市社会福祉協議会 (タカヤマシシャカイフクシキョウギカイ)
ホームページ	http://www.takayamashakyo.net/
所属/ 担当者名	高山市社会福祉協議会 地域福祉課 中林 力
連絡先	0577-55-3788
活動地域	高山市高根町

● 活動地域の概要

高根地域の状況

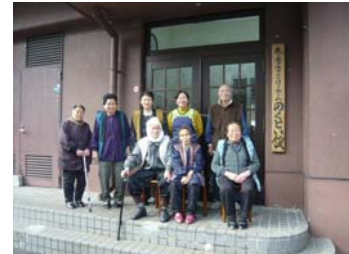
集落の数：11 集落（4世帯6人で構成する1地区も有る）人口：411人（H20年513人、H21年448人）
 年齢別人口構成の推移：合併や学校統廃合による人口流失があり、特に40歳代までの減少が著しい
 世帯数：216（H20年238、H21年223）高齢化率：45.7%（H20年44.0%、H21年46.3%）
 公共交通：旧高山市からの定期バス1日3本、福祉バス有り、町内タクシー無
 産業：農業、土建業、林業、サービス業が中心、町内では通年民間雇用は70人に満たない



【位置図】



【地域内の使われなくなった建物】



【冬季集合住宅に使用】

● 活動地域の課題

高山市の中でも高根地域の高齢化は著しく進行している。また、平成の大合併を機に旧高山市を中心とした人口移動が生じ、現時点では400人（合併時と比較し約20%減）に満たない。現在、人口移動は落ち着いた状態にあり、今後は自然動態による人口減少により地域が徐々に衰退していくと予想される。また、この地域は福祉ニーズを満たす社会資源も少なく、家庭の介護力も極めて低い。独居高齢者世帯の増加は、生活の不安等をより一層強いものにする。特に長く厳しい寒さが伴う冬期間は、外出もままならず閉じこもりがちになる。このことから、地域住民を中心とした高齢者の支援が今後益々必要である。

● 活動の内容

（全体）

合併等の人口減少に伴い、町内にある小中学校が隣接する朝日町内の学校と統廃合され、町内の学校とそれに伴う施設が遊休となった。この遊休施設に教員住宅があり、この建物を利用して冬季間（12月～3月）、不安を抱えながら生活している独居・高齢者を入居させる。この地域の冬季は寒さが厳しく雪も多い。そのため、外出手段を持たない高齢者はこの期間、家に閉じこもり安否確認もままならない状況である。このような人や他地域で暮らす家族に、安心と快適な生活を提供する。

（直近1年間の進捗など）

現在、高齢化もなんのその！地域の“絆”再生事業は3年目となり、今年はのくとい館開設事業のみの継続である。特産品づくりと販売拡大事業は、それぞれに予算廃止の影響を受けて継続が困難な状況である。のくとい館は高山市からの補助金を受けることができ、地域の2年間入居した人たちの強い要望もあり継続できている。

また、入居費の見直しも行い、現在入居料12,000円、家族支援（一親等以内）10,000円の22,000円としたが、入居者数の減少はない。このことは、高根地域に必要な事業として定着したことを意味する。

● 活動の成果

・全体

のくとい館開設事業が今年で3年目を迎え、入居者や遠くで暮らす家族の方に安心感を提供することができている。また、のくとい館に入居していない地域高齢者も、このような事業が将来利用できる可能性を感じていることで、安心して、高根の厳しい冬を過ごせるようになった。また、冬期間は地域の人の交流が減少したり、途絶えがちだったが、のくとい館を中心に交流が行われている。入居者の地域の方が、情報や雪の状態、また差し入れなどを持って訪問してくれるようになった。家族も以前より頻繁に会いに来るようになり、テレビや新聞で情報を得た昔の友達も訪ねてくる。

入居者の生活の変化は、年間を通して改善された。入居する前は夏の間、薪割りや保存食確保の重労働があり、雪が降る冬は、屋根の雪下ろしなどの除雪作業、極寒の中での一人暮らしの不安感、外出が億くうになることからの閉じこもりなどで、体調を壊すことも珍しくなかった。この人たちは、雪が消える4月が来るまで静かに耐えていた。しかし、のくとい館の生活は、このような生活を一変させてくれて、夏にも入居中に知り合った雪下ろしボランティアの学生が、ホームステイに来るなど、年間を通して、いくつもの楽しみが増えた。

入居者・家族の声

- ・こんなにあっという間に過ぎた冬は、今までなかったし、この年になって人の温もりを改めて感じる事ができた。
- ・ほんとうに楽しかった。本当に入居して良かった。健康である限り毎年利用したい。
- ・冬の間、家族や近所の人に気を使っていたが、ここは誰にも気兼ねすることなく生活ができる。
- ・冬期間、毎日心のどこかで気になっており、心配しすぎて体調を崩すこともあったが、この事業は私たちの生活をも、変えてくれた。また、本当に楽しそうにしている母の笑顔が、なにより嬉しい。

・直近1年間の成果など

事業開始当初、雲をつかむような話であり、理想論は理解できるが、果たして入居者がいるのか？という、周囲の見解があった。のくとい館の建物を管理している行政も同じような見解であり、修繕を必要とする箇所も多くあったが、なかなか進まなかった。ハード面を改善しても利用されなかったら、予算の無駄。誰しもが考えることである。事業の成功が行政の理解も得られ、補助金を出してもらえるまでになった。また、館内の手すりの取り付け、水洗対応の便座への交換、本来の入り口の不便さから、別に連絡通路を新たに作っていただいた。このように、行政の理解が得られたことは、安定して事業継続できることへとつながっていく。

● 今後の課題及び展望

・課題

入居者の経済力を加味しても、入居費を上げるにも限界がある。かといって、高山市の補助金もいつまでも付くものではない。しかしながら、予算難から事業の中止はあってならない。近い将来（3.4年後）に解決しなければならない大きな問題である。

現段階で解決策

- ・賄いや館内清掃を自分たち（入居者）で行い、雇用予算を削減し、限りなく入居費で運営できるようにする。
- ・この事業は、地域の高齢者支援事業として地域住民に浸透している。このことから、世帯協力金をお願いする試みを、連合町内会を通してお願いする。

・展望

この地域にあった事業として、高齢者や住民の期待度は大きく、将来解決しなければならない課題が数多くあるだろう。しかしながら、継続することを大前提に進めていきたい。

● その他（自由記述）

全国的にもめずらしいこの事業は、テレビや新聞でも大きく取り上げていただき、全国各地から視察や問い合わせが相次いでいる。同じような問題を抱える地域は、数多くあることを痛感した。この事業の取り組みが過疎や冬期間の高齢者支援の一つとして、全国に広まって行くよう情報を発信していきたい。